親のストレス対処方略に対する認知が大学生のストレス対処方略に及ぼす影響
—両親の養育態度を考慮して—

田所　健児*　笠井　仁**　鈴木　伸一***

The influences of parent's stress-coping style on child's coping strategies
—in consideration of parental bonding style—

Kenji Tadokoro*　Hitoshi Kasai**　Shin-ichi Suzuki***

The purpose of this study was to examine the influences of parent's stress-coping style on child's stress-coping strategies. Participants were 203 undergraduate students, who were asked to answer a set of questionnaire about stress-coping, parental bonding, and parent's stress-coping. The results of this study showed that (1) there were some differences between the effects of cognition about mother's stress-coping and about father's stress-coping on child's stress-coping strategies, and (2) the effects of cognition about mother's stress-coping and about father's stress-coping vary according to goodness of the parental bonding style.
Key words: stress, stress-coping, stress-coping strategy, Parental Bonding Instrument

問　題

ストレス対処（stress-coping）は，「個人の資源に負荷を与えたり，その資源を超えると評価された外的ないし内的要請を処理するために行う認知的・行動的努力」として定義され（Lazarus & Folkman, 1984），ストレッサーおよびそれに派生して生じる情動を処理するための認知的・行動的な努力過程であるとされる。我々はストレス対処の過程において，問題に積極的に向かい合うことで問題を解消したり，または感情を表出したり，気晴らし行動を取ったり，さらには回避的な行動や思考によって状況に対応するなど，さまざまなストレス対処方略（stress-coping strategy）を用いているとされる。

鈴木・神村（2001）は，従来のストレス対処に関する研究を展望し，ストレス対処方略の分類については，(a) 直面する問題に接近しようとするストレス対処方略であるか，あるいは回避しようとするストレス対処方略であるかというストレス対処の方向性に関する次元（接近 - 回避次元；Obrist, 1981 など），(b) 問題を解決することに焦点をあてたストレス対処方略であるか，あるい

*広島大学大学院教育学研究科(Graduate School of Education, Hiroshima University)
**筑波大学大学院人間総合科学研究科（心理学系）(Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba)
***広島大学大学院教育学研究科付属心理臨床教育研究センター(Training and Research Center for Clinical Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University)

は情緒的な混乱の鎮静に焦点をあてたストレス対処方略であるかという行動の焦点をどこに向けるかに関する次元（問題 - 情動次元；Folkman & Lazarus, 1980 など），(c) 行動的なストレス対処方略であるか，あるいは認知的なストレス対処方略であるかというストレス対処の表出系に関する次元（行動 - 認知次元；Billings & Moos, 1981 など）が提唱されていることを指摘している。また，この“接近 - 回避次元”，“問題 - 情動次元”，“行動 - 認知次元”という３次元の組み合わせにより，ストレス対処の下位カテゴリーは８領域に分類できることが実証的に明らかにされており（鈴木，2004），それに基づく尺度も作成されている（神村・海老原・佐藤・戸ケ崎・坂野，1995）。

従来のストレス対処の研究において，ストレス対処方略の採用傾向の個人差や，使用するストレス対処方略の選択に影響を及ぼす個人の内的変数に関する研究は多く行われている（尾関・原口・津田，1991 など）。しかし，このようなストレス対処方略を個人がどのようにして獲得していくのかを検討している研究は少ない。個人の生活行動が，発達過程において環境からの学習によって形成される一面を持つように，ストレス対処方略においても，生活上の出来事を通して学習されていると考えられる。

発達過程において，発達初期から成長に重要な役割を果たすのは，親である。例えば，毛利・伊達・廣畑・武内・中井・塩見・庄田・芥川・進藤・中道（2001）や，嶋田・神村（2001）は，日常における学校ストレスと親の養育態度との関連を検討している。毛利他（2001）は，高校生と大学生の青年期の学校ストレスと子どもからみた親の養育態度との関連を検討し，幼児期の一貫性のない養育態度は青年期の学校ストレスに影響することを示唆した。しかし，毛利他（2001）の研究においては，個人のストレス対処方略については考慮されていない。嶋田・神村（2001）は，ストレス対処方略を考慮した上で，中学生を対象に親の養育態度と心理的ストレス過程の関連について調査を行った。その結果，保護者の養育態度は，中学生の心理的ストレス過程に直接的な影響を及ぼしていないものの，中学生のサポート希求方略や保護者に対するサポート期待には親の養育態度の影響がみられることを示唆した。このように，個人のストレス対処方略は，両親からの影響を少なからず受けているものと推測される。このことから考えると，親が問題回避的なストレス対処方略を頻繁に用いていたり，問題に対する親の積極的な姿を子が日々目にした場合，子もまた親と同じようなストレス対処方略を行なう傾向が高くなる可能性が考えられる。一方，親との関係性に問題がみられる場合，親の行動を反面教師として捉え，親とは逆のストレス対処方略を取る可能性も考えられる。例えば，個人のストレス対処方略と親の養育態度を扱った研究としては，上原・佐藤・坂戸・坂戸・佐藤（1997）によるものが挙げられる。上原他（1997）は，問題焦点型のストレス対処方略には母親の愛情深い養育態度が関係し，情動焦点型のストレス対処方略は母親の養育態度が過保護である，もしくは無関心であるほど選択されやすいことを示唆している。

以上のように，親の養育態度が個人のストレス対処方略に関連するという示唆が得られている。しかし，現状としてはこのような点を検討した研究の数は少なく，上原他（1997）は今後の前方向的な検討が必要であると指摘している。また，嶋田・神村（2001）の研究は対象が中学生であるのに対し，上原他（1997）の研究では，うつ病からの寛解状態を迎えた症例を対象としているなど，調査対象も共通していない。親の養育態度の評定についても，親自身による評定か，子による評定

かについて違いがみられるなど，各研究間における条件の差異も大きい。さらに，両親のストレス対処方略が個人のストレス対処方略とどのように関連しているのかについて検討した研究は見受けられない。

そこで本研究では，第１に，子によって認知される親のストレス対処方略と，子自身のストレス対処方略との関連について検討することを目的とする。第２に，母親と父親の養育態度の望ましさによって，子が認知する親のストレス対処方略と子のストレス対処方略との関連に違いがみられるかについて検討することを目的とする。

方　法

調査対象　大学生 241 名を対象として質問紙調査を行った。そのうち，記入上不備があるものを除いた 203 名（男性 108 名，女性 95 名）を分析対象とした。平均年齢は 19.46 歳（18 歳—21 歳）であった。

調査時期　2004 年 11 月下旬，個別記入方式の質問紙を，大学の講義時間内に集団配布集団回収方式で行った。回答はいずれも無記名で行なわれた。

調査尺度　①大学生のストレス対処方略尺度：神村他（1995）の３次元モデルに基づく対処方略尺度（Tri-axial Coping Scale：以下，TAC-24 とする）を用いた。精神的につらい状況において，頻繁に用いられるストレス対処方略を測定する尺度であり，24 項目からなる。「対処のねらいとされているのは具体的問題解決か，あるいは情動調整か」という「問題焦点 - 情動焦点」軸，「積極的に関わる態度か回避あるいは無視して距離を置こうとする態度か」という「接近 - 回避」軸，「機能は認知系か行動系か」という「表出系」軸の３つの軸の組み合わせによる８下位尺度を含む。下位尺度はそれぞれ，情報収集（接近・問題焦点・行動），放棄・諦め（回避・問題焦点・認知），肯定的解釈（接近・情動焦点・認知），計画立案（接近・問題焦点・認知），回避的思考（回避・情動焦点・認知），気晴らし（回避・情動焦点・行動），カタルシス（接近・情動焦点・行動）である。 回答は，各項目それぞれについて「そのようにしたこと（考えたこと）はこれまでない：1」から，「いつもそうしてきた（考えてきた）：5」までの５件法によって回答を求め，1—5 点を与えた。

②大学生の心理的ストレス反応：鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野（1997）によって作成された心理的ストレス反応尺度（Stress Response Scale-18：以下，SRS-18 とする）を使用した。この尺度は，心理的ストレス反応を簡便に，かつ多面的に測定することが可能な尺度とされ，18 項目から構成される。抑うつ・不安，不機嫌・怒り，無気力の３下位尺度から構成される。回答は，各項目それぞれについて，「全くちがう：0」から「その通りだ：3」までの４件法によって回答を求め，0—3 点を与えた。

③両親のストレス対処方略尺度： TAC-24 （神村他，1995）の教示を一部改変して用いた。「あなたの母親（父親）は，精神的につらい状況に遭遇したとき，その場の困難を乗り越え，落ち着くために，普段から，どのように考え，どのように行動していたと思いますか」という教示に基づき，回答は，母親のストレス対処方略と父親のストレス対処方略のそれぞれについて，「そのようにしたことはこれまでないと思う：1」から「いつもそうしていたと思う：5」までの５件法より求め， 1

—5 点を与えた。

④親の養育態度尺度： Parker et al.（1979）によって作成された Parental Bonding Instrument（以下，PBI とする）を，北村（1988）が邦訳した日本語版 PBI を用いた。16 歳までの本人の記憶をもとに，過去の両親それぞれの養育態度を父親・母親別々に評価する尺度であり，父親用，母親用それぞれ 25 項目の質問項目から構成される。回答は，母親，父親それぞれについての質問に対し，「全く該当しない：0」から「該当する：3」までの４件法により回答を求め， 0—3 点を与えた。なお，25 項目の質問項目は，care 因子 12 項目と overprotection 因子 13 項目から構成される。care 因子は，care-neglect を規定する因子であり，得点が高いほど親の養育態度が受容的で愛情深いことを示し，逆に得点が低いほど無関心または拒絶的であったことを示すとされる。overprotection 因子は，overprotection-autonomy の軸を規定する因子であり，得点が高いほど親の養育態度が過保護，過干渉であることを示し，逆に得点が低いほど自立性を尊重していたことを示すとされる。

結　果

1．因子構造と尺度の信頼性の確認

TAC-24 の因子構造を確認するために，大学生，母親，父親のそれぞれの TAC-24 について，原著と同様の因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。その結果，大学生についての TAC-24 では，原著と同様の８つの因子が得られ，複数の因子に高い負荷量を示す項目も少なかった。母親と父親についての TAC-24 では，６因子が確認された。６因子のうち，４つの因子については原著と同様の項目で構成されており，残り２つの因子については原著において高い相関を示した２つの因子がそれぞれ合わさった項目で構成されていた。大学生の TAC-24 について，因子の抽出基準を６因子に固定した再分析を行ったところ，母親・父親の TAC-24 と同様の６因子構造を確認することができた。そこで，原著と類似した因子のまとまりを持つ点，各因子に負荷する質問項目のまとまりが母親・父親の TAC-24 についての因子分析結果と同様のまとまりである点から，検討・解釈のしやすさを考慮し，６因子の結果を採用することにした。第１因子は，原著における「放棄・諦め」因子と「責任転嫁」因子を構成する項目であり，問題に焦点をあて，それに対し回避的な態度をとる因子と解釈されたため，“回避的問題対処”因子と命名された。第２因子は，原著における「計画立案」因子と「情報収集」因子を構成する項目であり，問題に焦点をあて，それに対し接近的な態度をとる因子と解釈されたため，“接近的問題対処”因子と命名された。第３因子から第６因子については，原著と同様の因子構造であることから，原著に倣ってそれぞれ “カタルシス”因子，“肯定的解釈”因子，“回避的思考”因子，“気晴らし”因子と命名された。

大学生の TAC-24 について，各因子の α 係数は，「回避的問題対処」因子で $\alpha=.80$，「接近的問題対処」因子で $\alpha=.78$，「カタルシス」因子で $\alpha=.83$，「肯定的解釈」因子で $\alpha=.75$，「回避的思考」因子で $\alpha=.74$，「気晴らし」因子で $\alpha=.69$ であった。母親の TAC-24 については，それぞれ $\alpha=.78$，.86，.79，.71，.71，.75 であった。また，父親の TAC-24 については，それぞれ $\alpha=.87$，.88，.74，.75，.73，.70 であった。

次に，SRS-18 の因子構造を検討するために，SRS-18 の全項目を対象にして原著と同様の因子分

析（主因子法，バリマックス回転）を行った。その結果，複数の因子に高い負荷量を示す項目が認められ，因子構造が原著のものとは一致しなかった。そこで，どの因子にも負荷量の低い項目と因子の解釈を困難にする項目を除外した上で，３因子を基準として再度同様の因子分析を行った。その結果，原著とほぼ同様の因子構造を確認することができた。不機嫌・怒り因子，無気力因子，抑うつ・不安因子について，信頼性係数はそれぞれ $\alpha=.87$，.84，.88 であった。

さらに，PBI の因子構造を検討するために，母親用，父親用の各項目について因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行なった。その結果，母親と父親のそれぞれについて原著と同様の２因子構造（care 因子，overprotection 因子）を確認することができた。信頼性係数は，母親の care 因子が $\alpha=.88$，母親の overprotection 因子が $\alpha=.87$，父親の care 因子が $\alpha=.87$，父親の overprotection 因子が $\alpha=.83$ であった。

２．大学生のストレス対処方略と大学生の心理的ストレス反応の関連

大学生の心理的ストレス反応に影響を及ぼしている大学生のストレス対処方略を明らかにするために，大学生における TAC-24 の６因子「回避的問題対処」「接近的問題対処」「カタルシス」「肯定的解釈」「回避的思考」「気晴らし」の各得点を独立変数，SRS-18 の３因子「不機嫌・怒り」「無気力」「抑うつ・不安」の各得点を従属変数とした重回帰分析を行なった（Table 1）。分析は，ステップワイズ法であり，変数採択の基準は $p<.05$ であった．その結果，「不機嫌・怒り」因子に対して，「カタルシス」因子（$\beta=.217$，$p<.01$）と「肯定的解釈」因子（$\beta=-.149$，$p<.05$）が有意な予測因子として抽出され，説明率は $R^2=.056$ であった。「無気力」因子においては，「回避的問題対処」因子（$\beta=.324$，$p<.01$），「カタルシス」因子（$\beta=.144$，$p<.01$），「肯定的解釈」因子（$\beta=-.207$，$p<.01$），「気晴らし」因子（$\beta=.135$，$p<.05$）が有意な予測因子として抽出され，説明率は $R^2=.165$ であった。「抑うつ・不安」因子においては，「回避的問題対処」因子（$\beta=.151$，$p<.05$），「カタルシス」因子（$\beta=.242$，$p<.01$），「肯定的解釈」因子（$\beta=-.187$，$p<.01$）が有意な予測因子として抽出され，説明率は $R^2=.089$ であった。

以上の結果は，大学生のストレス対処方略のうち，「肯定的解釈」が大学生の心理的ストレス反応に対して負の関連を示し，「回避的問題対処」「カタルシス」「気晴らし」が，心理的ストレス反応に正の関連を示すことを示唆している。このことから，大学生のストレス対処方略のうち，本研究における大学生の心理的ストレス反応に対して適応的な対処方略は「肯定的解釈」であり，不適応な対処方略は「回避的問題対処」「カタルシス」「気晴らし」であることが示唆された。そこで以降の分析では，心理的ストレス反応との関連が示された「肯定的解釈」「回避的問題対処」「カタルシス」「気晴らし」に焦点をあて，大学生の認知する親のストレス対処方略と，大学生の「肯定的解釈」「回避的問題対処」「カタルシス」「気晴らし」との関連を検討することにした。

Table 1.　重回帰分析結果

	不機嫌・怒り	無気力	抑うつ・不安
大学生のストレス対処方略			
回避的問題対処		.324**	.151*
接近的問題対処			
カタルシス	.217**	.144**	.242**
肯定的解釈	-.149*	-.207**	-.187**
回避的思考			
気晴らし		.135*	
R^2	.056	.165	.089

*p<.05　**p<.01

3．大学生の認知する親のストレス対処方略と大学生のストレス対処方略の関連

大学生が認知する親のストレス対処方略と大学生自身のストレス対処方略の関連を明らかにするために，母親・父親における TAC-24 の６因子「回避的問題対処」「接近的問題対処」「カタルシス」「肯定的解釈」「回避的思考」「気晴らし」の各得点を独立変数とし，大学生の適応的なストレス対処方略であると示唆された「肯定的解釈」と，不適応なストレス対処方略であると示唆された「回避的問題対処」「カタルシス」「気晴らし」の４因子を従属変数とした重回帰分析を行なった（Figure 1-1，Figure 1-2：図中の矢印は有意なパスを示し，数字は標準偏回帰係数を示す。実線が正のパスを示し，破線が負のパスを示す）。その結果，大学生の「肯定的解釈」については，母親の「肯定的解釈」（β＝.164，p＜.05）と父親の「肯定的解釈」（β＝.320，p＜.01）の影響性が認められ，母親からは，さらに「カタルシス」（β＝.143，p＜.05）の影響性が認められた。また，大学生の「回避的問題対処」については，母親の「回避的問題対処」（β＝.330，p＜.01）と父親の「回避的問題対処」（β＝.241，p＜.01）の影響性が認められ，母親からはさらに「肯定的解釈」（β＝.182，p＜.01）の影響性が認められた。大学生の「カタルシス」については，母親のストレス対処方略のうち「カタルシス」（β＝.245，p＜.01）と「回避的問題対処」（β＝－.205，p＜.05）の影響性が認められ，父親のストレス対処方略からは「肯定的解釈」（β＝.162，p＜.05）の影響性が認められた。大学生の「気晴らし」については，母親の「気晴らし」（β＝.327，p＜.01）と父親の「気晴らし」（β＝.220，p＜.01）の影響性が認められ，父親からは，さらに「肯定的解釈」（β＝.158，p＜.05）の影響性が認められた。このことから，親のストレス対処方略についての認知は，大学生自身のストレス対処方略に影響を及ぼしており，その影響性は母親と父親で異なることが示唆された。

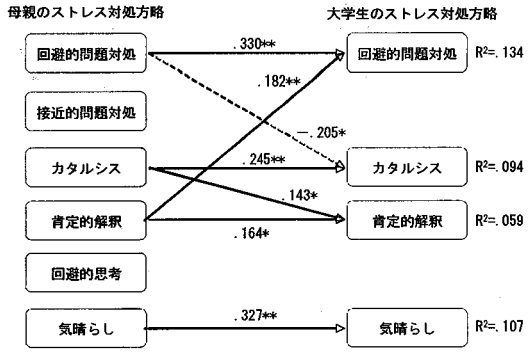

Figure 1-1. 母親のストレス対処方略と大学生のストレス対処方略の関連（*p<.05, **p<.01）

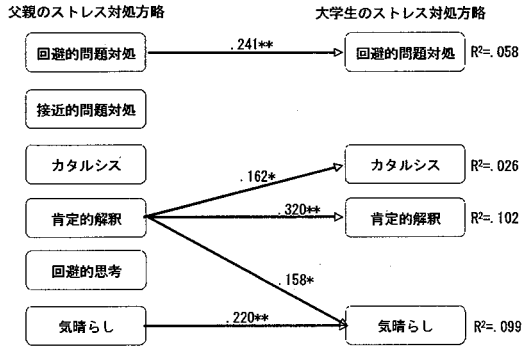

Figure 1-2. 父親のストレス対処方略と大学生のストレス対処方略の関連（*p<.05, **p<.01）

4．親の養育態度の望ましさの違いからみた親と大学生のストレス対処方略の関連

親のストレス対処方略が大学生のストレス対処方略に及ぼす影響において，親の養育態度の望ましさによる違いがみられるかどうかを検討するために，親の養育態度が望ましい群と望ましくない群を構成し，群別に親のストレス対処方略と大学生の「肯定的解釈」「回避的問題対処」「カタルシス」「気晴らし」との関連を重回帰分析により検討した。

まず，PBI の得点を基に，親の養育態度が望ましい群と望ましくない群を構成した。母親の養育態度，父親の養育態度のそれぞれについて「望ましい」群と「望ましくない」群を設定する際の基準には，Parker（1983）の方法に従い，PBI の cut-off point を用いた。cut-off point は，母親 care27 点，母親 overprotection13.5 点，父親 care24 点，父親 overprotection12.5 点である。したがって，母親の care 得点が 27 点以上かつ母親の overprotection 得点が 13.5 点以下の回答者を「母親の養育態度が望ましい群」とし，それ以外の回答者を「母親の養育態度が望ましくない群」であるとした。同様に，父親の care 得点が 24 点以上かつ父親の overprotection 得点が 12.5 点以下の回答者を「父親の養育態度が望ましい群」とし，それ以外の回答者を「父親の養育態度が望ましくない群」であるとした。

次に，親のストレス対処方略の６因子「回避的問題対処」「接近的問題対処」「カタルシス」「肯定的解釈」「回避的思考」「気晴らし」の各因子得点を独立変数，大学生のストレス対処方略である「肯定的解釈」「回避的問題対処」「カタルシス」「気晴らし」の因子得点を従属変数とした重回帰分析を群別に行なった。分析はステップワイズ法であり，変数採択の基準は $p<.05$ であった（Figure 2-1，2-2，3-1，3-2：図中の矢印は有意なパスを示し，数字は標準偏回帰係数を示す。実線が正のパスを示し，破線が負のパスを示す）。その結果，母親の養育態度が望ましい群においては，大学生の「肯定的解釈」について，母親の「カタルシス」（$\beta=.271$，$p<.01$）と「肯定的解釈」（$\beta=.212$，$p<.05$）の影響性が認められた（Figure 2-1）。大学生の「回避的問題対処」については，母親の「回避的問題対処」（$\beta=.448$，$p<.01$）と「接近的問題対処」（$\beta=.288$，$p<.01$）の影響性が認められた。大学生の「カタルシス」については，母親の「カタルシス」（$\beta=.398$，$p<.01$）と「回避的問題対処」（$\beta=-.247$，$p<.05$）の影響性が認められた。大学生の「気晴らし」については，母親の「気晴らし」（$\beta=.406$，$p<.01$）の影響性が認められた。これに対し，母親の養育態度が望ましくない群においては，大学生の「回避的問題対処」について，母親の「回避的問題対処」（$\beta=.199$，$p<.01$）と「肯定的解釈」（$\beta=.280$，$p<.01$）の影響性が認められた（Figure 2-2）。大学生の「気晴らし」については，母親の「気晴らし」（$\beta=.259$，$p<.01$）の影響性が認められた。大学生の「肯定的解釈」「カタルシス」においては，母親のストレス対処方略の影響性は認められなかった。

一方，父親の養育態度が望ましい群においては，大学生の「肯定的解釈」について，父親の「肯定的解釈」（$\beta=.374$，$p<.01$）の影響性が認められた（Figure 3-1）。大学生の「回避的問題対処」については，父親の「回避的問題対処」（$\beta=.393$，$p<.01$）と「接近的問題対処」（$\beta=.230$，$p<.05$）の影響性が認められた。大学生の「気晴らし」については，父親の「気晴らし」（$\beta=.211$，$p<.05$）の影響性が認められた。大学生の「カタルシス」については，父親のストレス対処方略の影響性は認められなかった。これに対し，父親の養育態度が望ましくない群においては，大学生の「肯定的解釈」について，父親の「肯定的解釈」（$\beta=.303$，$p<.01$）の影響性が認められた（Figure 3-2）。大学生の「カタルシス」については，父親の「肯定的解釈」（$\beta=.246$，$p<.01$）の影響性が認められた。大学生の「気晴らし」については，父親の「気晴らし」（$\beta=.238$，$p<.05$）と「肯定的解釈」（$\beta=.282$，$p<.01$）の影響性が認められた。大学生の「回避的問題対処」については，父親のストレス対処方略の影響性は認められなかった。

以上の結果から，親のストレス対処方略と大学生のストレス対処方略との関連には，親の養育態度の望ましさによって差異がみられることが示唆された。

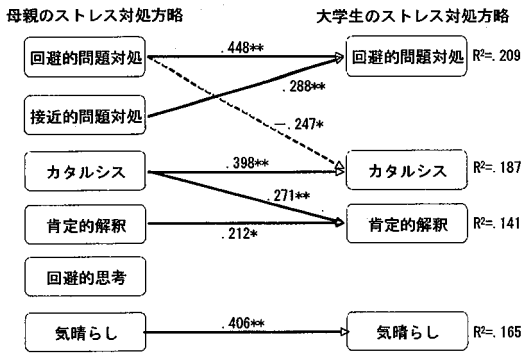

Figure 2-1. 母親の養育態度が望ましい群における母親のストレス対処方略と大学生のストレス対処方略の関連（*p<.05, **p<.01）

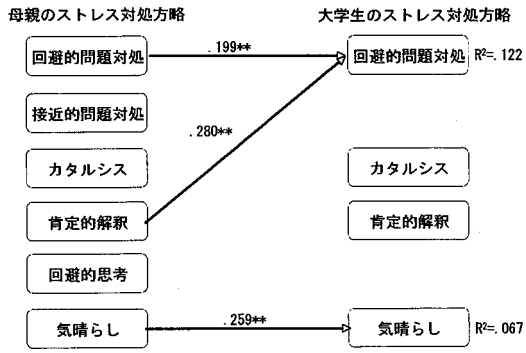

Figure 2-2. 母親の養育態度が望ましくない群における母親のストレス対処方略と大学生のストレス対処方略の関連（*p<.05, **p<.01）

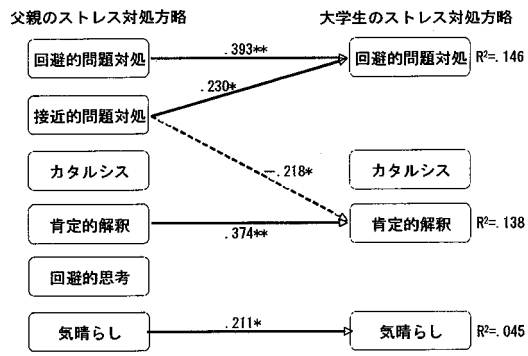

Figure 3-1. 父親の養育態度が望ましい群における父親のストレス対処方略と大学生のストレス対処方略の関連（*p<.05, **p<.01）

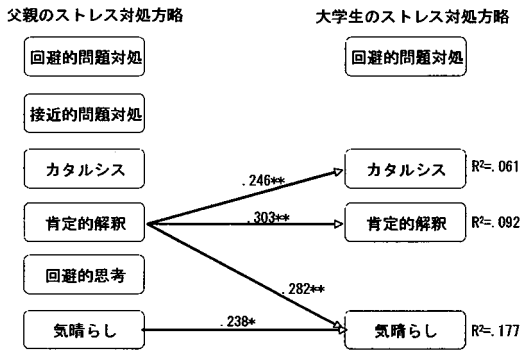

Figure 3-2. 父親の養育態度が望ましくない群における父親のストレス対処方略と大学生のストレス対処方略の関連（*p<.05，**p<.01）

考　察

本研究の目的は，子によって認知される親のストレス対処方略と，子自身のストレス対処方略との関連について検討し，さらに，母親と父親の養育態度の望ましさによって，その関連に違いがみられるかについて検討することであった。

まず，大学生のストレス対処方略が大学生の心理的ストレス反応に及ぼす影響を検討した。その結果，大学生のストレス対処方略６因子のうち「回避的問題対処」「カタルシス」「肯定的解釈」「気晴らし」の４因子が大学生の心理的ストレス反応との間に有意な関連を示した。そして，心理的ストレス反応の軽減に有効なストレス対処方略は，「肯定的解釈」であり，不適応なストレス対処方略は「回避的問題対処」「カタルシス」「気晴らし」あることが示唆された。これは，ストレス対処方略の３次元モデル（神村他，1995）において，大学生の心理的ストレス反応に負の強い影響性を示すのは“肯定的解釈（接近・情動・認知型）”であり，それ以外のストレス対処方略は大学生の心理的ストレス反応に正の影響性を示したという研究結果（鈴木，2004）と一致している。

次に，親のストレス対処方略が大学生のストレス対処方略に及ぼす影響を，母親と父親のそれぞれについて検討した。その結果，大学生の認知する親のストレス対処方略は，大学生のストレス対処方略に影響を及ぼしていることが示され，その影響性は母親と父親で異なることが示唆された。ストレス対処の研究においては，個々のストレス対処方略の性質や効果についての研究だけでなく，状況に応じたストレス対処方略の運用を行う能力についての研究も注目されている（鈴木，2001）。このようなアプローチの中で，ストレス対処方略の運用が柔軟なものは，抑うつ傾向が低く，精神的に健康であることが示唆されており（加藤，2001），また，ストレスフルなイベントに遭遇した際，選択可能なストレス対処方略に多様性（repertoire/versatility of coping）があるほど，ストレス低減効果が高いということが実証されている（Westman & Shirom，1994 など）。しかし，運用されるストレス対処方略自体がどのように身につけられているのか，またストレス対処方略の選択における判断プロセスについては明らかになっていない。本研究の結果から，個人のストレス対処方略の運用においては，親のストレス対処方略についての認知が影響を及ぼしていることが示唆された。この

ことから，ストレス対処の過程やストレス対処方略の運用過程において，個人は両親からの影響を少なからず受けているものと考えられた。また，母親と父親では影響性が異なることから，個人のストレス対処方略に及ぼす親の影響性は，親の性別や性役割，あるいは共に過ごす生活時間の総量などの諸要因の影響を受けている可能性も考えられた。

さらに，親のストレス対処方略が大学生のストレス対処方略に及ぼす影響について，親の養育態度による違いがみられるかどうかについて検討した。その結果，親の養育態度の望ましさによって，大学生が認知する親のストレス対処方略と大学生のストレス対処方略との関連には，違いがみられることが示唆された。親の養育態度と個人のストレス対処方略の関連については，母親の愛情深い養育態度が問題焦点型のストレス対処方略に関係し，母親の養育態度が過保護である，もしくは無関心であるほど情動焦点型のストレス対処方略が選択されやすいことが示唆されている（上原他，1997）。上原他（1997）の研究では，ストレス対処方略選択に直接影響を与える要因として親の養育態度を取り上げ，ストレス対処方略との関連を検討している。しかし，本研究の結果から，親のストレス対処方略についての認知も個人のストレス対処方略に影響を及ぼしており，その影響性は親の養育態度の望ましさによって違いがみられることが示唆された。このことから，個人のストレス対処方略について，親の養育態度からの直接的な影響だけでなく，親のストレス対処方略も影響性をもつと考えられ，その影響性には親の養育態度が間接的に関与していると考えられる。また，上原他（1997）の研究では，父親の養育態度は個人のストレス対処方略選択に直接影響を与えないという結果が示唆されているが，本研究の結果においては，父親のストレス対処方略も個人のストレス対処方略に影響を及ぼしていることが示唆され，その影響性は父親の養育態度によって異なることが示された。このことから，父親の養育態度は，個人のストレス対処方略に直接的には影響を及ぼさないが，父親のストレス対処方略の影響性に関与するかたちで，個人のストレス対処方略に関連している可能性が考えられた。

まとめ

本研究の結果から，子が認知する母親・父親のストレス対処方略と子のストレス対処方略との間にはそれぞれ関連がみられた。また，親の養育態度の望ましさによって，親と子のストレス対処方略の関連に差異がみられることが確認された。このことから，個人のストレス対処方略には，個人の内的な要因だけではなく，重要な他者のストレス対処方略もまた関連している可能性が示唆された。また，母親と父親とでは，子のストレス対処方略に対して認められる影響性が異なるという点も本研究における知見のひとつであるといえる。両親の存在は子のストレス対処方略においても影響力をもつことが示唆されたことから，ストレスマネジメント教育などの予防的なアプローチの展開において，個人が適応的なストレス対処を身に付けるためには，家庭という比較的早期の場における活動の展開や，子だけでなく親に対する心理教育も組み込む必要性があると考えられた。

引用文献

Allen, J. P., Moore, C., Kuperminc, G., & Bell, K. (1998). Attachment and adolescent psychological functioning. *Child Development*, **69**, 1406-1419.

Billings, A. G., & Moos, R. H. (1981). The role of coping responses and social resources in attenuating the stress of life events. *Journal of Behavior Medicine*, **4**, 139-157.

Folkman, S., & Lazarus, R.S. (1980). An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health and Social Behavior*, **21**,219-239.

神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二（1995）．対処方略三次元モデルの検討と新しい尺度（TAC-24）の作成　筑波大学教育相談研究, **33**, 41-47.

加藤　司（2001）．コーピングの柔軟性と抑うつ傾向との関係　心理学研究, **72**, 57-63.

北村俊則（1988）．精神症状測定の理論と実際　海鳴社

Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer.

毛利友美・伊達美和・廣畑雄・武内清輝・中井朋昭・塩見邦雄・庄田明子・芥川次郎・進藤昌浩・中道正昭（2001）．青年期における学校ストレス反応と親の養育態度の関係について（II）　日本教育心理学会総会発表論文集. **43**, 323.

Obrist, P. A. (1981). *Cardiovascular psychophysiology*. New York: Plenum Press.

尾関友佳子・原口雅浩・津田　彰（1991）．大学生の生活ストレッサー，コーピング，パーソナリティとストレス反応　健康心理学研究, **4**, 1-9.

Parker, G. (1983). Parental 'affectionless control' as an antecedent to adult depression. *Arch Gen Psychiatry*, **40**,956-960.

Parker, G., Tupling, H., Brown, L.B. (1979). A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology*, **52**,1-10.

嶋田洋徳・神村栄一（2001）．中学生の心理的ストレスに及ぼす保護者の養育態度の影響　日本教育心理学会総会発表論文集, **43**, 652.

鈴木伸一（2004）．三次元モデルによるコーピング分類の妥当性の検討　心理学研究, **74**, 504-511.

鈴木伸一・神村栄一（2001）．コーピングとその測定に関する最近の研究動向　ストレス科学, **16**, 51-64.

鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二（1997）．新しい心理的ストレス反応尺度（SRS-18）の開発と妥当性の検討　行動医学研究, **4**, 22-29.

上原徹・佐藤聡・坂戸薫・坂戸美和子・佐藤哲哉（1997）幼少期における両親の養育態度はストレス対処行動に影響を与えるか?　心身医学, **37**(抄録), 169.

Westman, M., & Shirom, A. (1994). Dimensions of coping behavior : A proposed conceptual framework. *Anxiety, Stress, and Coping*, **8**, 87-100.